

古集会モスク再訪記

近藤 信彰

近年、テヘランの都市社会史の研究を進めている。常識的にはフィールド・ワークは不可欠である。しかし、恥ずかしながら、本格的なフィールド・ワークと呼べるようなものは行ったことはない。文献収集に時間が取られ、町を歩く暇がないのと、自分が調査者になりきれないせいである。19世紀のたたずまいを残すテヘランのバーザールはいつも人混みであふれていて、変な外人の相手をしてくれそうもないような気がする。ぼーっと立っているとひっきりなしに往来する荷車を足で轆かれそうである。それに、なるべくイラン人と同じ行動を取りたいので、たとえば、吉祥寺のサンロードで聞き取り調査をするのと同じような（もちろんしたことはないが）気恥ずかしさを感じてしまうのである。

そんななかで、昨年夏、東大生産研を中心とする建築のグループのバーザール調査に数日つきあう機会があった。「ここには大量破壊兵器はないぞ」とか「この建物は地震が来たら壊れるか」とか勘違いの質問をさばきつつ、外人になりきって、ぶしつけに根掘り葉掘り質問をするのはそれなりの快感ではあった。

しかし、やはり印象に残っているのは、かつて論文で扱った古集会モスクを再訪したことである（写真）。管理人はE氏という人物であった。以前訪問したときにも世話になったのだが、ぶらっと何の許可もえざり行ったので、結構面倒くさそうに案内してくれた。今回は文化遺産庁のお墨付きがあったせいか、あるいは建築の専門家が同行してくれたせいか、非常に熱心であった。

このモスクはテヘランでは古い建築物で、ワクフ（宗教寄進）文書によれば少なくとも1651年までは遡ることができる。しかし、その文書はワクフ庁に保管されており、E氏自身は存在すら知らないようであった。いや、文化遺産庁ですら関係するワクフ文書の詳細をつかんでいないのである。

それはさておき、E氏が特に熱心に案内してくれたのはチェヘルソトゥーン（40の柱の意）という名前の礼拝室であった。前回訪問したときは改修工事中だったのだが、今回はもう少しで終わりそうのところまで進んでいた。彼は、地下に排水路を新たに掘り、湿気の害を防ぐのだと、1メートル幅の排水路の中まで見せてくれたのである。身をかがめて暗い穴蔵にもぐり、これは歴史的なものではないからあまり意味がないなと思いながら、彼の熱心さに抗しかねていた。ほかに彼が見せたがったのは衛生的な水場とか、柱をうまく入れて拡張した礼拝室などであった。歴史学や建築学の見地からはほとんど価値のないものばかりである。

しかし、彼は、当たり前のことではあるが、モスクがあくまで日々の礼拝の場であり、歴史的・建築的な価値など、当事者にとっては二の次であることを教えてくれた。思えば、自分の書いた論文の趣旨は、改修・増築を重ねながら、いかにして19世紀に至るまでこのモスクを人々が守り続けてきたかということであった。物語は今日まで続き、E氏はまさにその主役なのである。

